

「物質性」という語の射程は、モノ (object) の製作技法や社会的役割や文化的意味にとどまらない。世界と人間が物質 (matter, material) からできているという事実の全体である。

人が生まれ落ち、生き、死んでいく、この世界はどのような世界なのか——などとぼんやり考えながら歩いていて、石に躓いて怪我をして血が出る。痛い。石がもつと軟らかく、皮膚がもつと硬かったら、違っただろう。こうしてわたしは、この世界が、さまざまな性質をもつさまざまなモノから成り立っていることを痛感する。しかもモノの性質は不変ではなく、萎びたり、摩耗したり、錆びたり、腐ったりする。それは必ずしも劣化ではない。たとえば、仏像が古色を帯びたり、道具が手になじんだりもする。モノとしての同一性も永久ではなく、分解したり変質したりして別のモノへと変じていく。石は岩から砂への変容の途上にある。わたしの身体も、単細胞から発して多様な物質を摂取・排出した末、死んで土に還るか、焼かれて「お骨」になる。つまり、ある物質にとって、あるモノとして存在するのは一時にすぎない。物質は、生々流転・輪廻転生の流れのなかにある。

人間は、物質世界に外から関与するのではなく、そのなかで生きている。人類学者のインゴルドは、それを「住み込んでいる」 (inhabit, dwell in) と表現する。この世界は住人に対して条件として働く。つまり物質は、人間の行動を制約すると同時にさまざまなことを可能にする。海は行く手を遮り、粘土は器の素材となる。しかし船を操れる者には海は障害ではなく、土器の作り方を知らなければ粘土は器にならない。要するに、物質の

物質性 Materiality

ふるか よしあき 古谷 嘉章 九州大学教授

人間学の キーワード

果てしない……

性質は、それを体験する人間との関係のなかで意味を獲得する。わたしたちは身体に具わる感覚を介して世界を体験する。そのとき、視覚に勝るとも劣らない重要性をもつのが、物質との「触れる・触る」というかかわりである。わたしたちは、物質世界に直に働きかけ、物質を材料として自然界には存在しなかったモノを作り出す。そのなかで、文化という営みが姿を現す。

二十一世紀の今日、身体を介した直のかかわりではなく、インターネットや仮想現実が重要性を増して、世界の物質性が希薄になりつつあるかのようだ。しかし、人間はまだ、物質たる身体を脱ぎ捨てて純粋な意識へと進化してはいない。仮想現実も、装置なしでは存在できないのだから、物質世界の外側にあるわけではない。

わたしたちが生きる物質世界は、自然科学の守備範囲とされている。それに対して、民族誌が報告してきたさまざまな文化の世界観は、神話や物語としては興味深くても、客観的物質世界についての正しい科学的記述とは違う「誤った解釈」にすぎないと考えられている。しかし、それはさまざまな世界観を生きる人々に対する真摯な態度といえるだろうか。物質世界について人類学として問うべきことは、またたくさんあるのではないか。

「物質世界は人間にとってどのような条件か」「人間は物質世界をどのように体験し、どのように働きかけるのか」「人間はどのような物質世界に住んでいるのか」という、以上の問いの要にあるもの、それが「物質性」にほかならない。